

## 2006年集中講義 ラテンアメリカ地域論Ⅱ(ブラジル社会論) 筆記試験の正答と講評 by 山崎圭一(横国大経済学部教授)

### ■ 筆記試験について ■

#### 設問Ⅰ(正誤判定問題)

正答：(1)A (2)B (3)B (4)C (5)D (6)A (7)A (8)C

講評：8番のBNH倒産の理由としては、Aの幹部の腐敗も完全には否定できないだろうが、ここではCを正解とした。

#### 設問Ⅱ(キーワード解説問題)

正答：省略

講評：どの人もだいたいよくできていた。(1)のレアル政策は、講義であまり触れなかったもので、正答者がほとんどいなかったが、できるだけ部分点を与えた。これは1994年に当時の財務大臣だったフェルナンド・エンリケ・カルドゾが実施したインフレ抑制策で、これで年間3000%近かったインフレが数十%へと収束したのである。その後10年以上にわたり低インフレが継続している。この政策は、為替アンカー策と財政緊縮を組み合わせたものである。為替アンカー策とは、ドルにほぼ1対1の割合でブラジル通貨をペッグ(固定)させることである。実際にはミニ・バンダという狭い範囲内での変動は認めた。いずれにせよ、これでレアルへの信任が高まり、値上げの連鎖が切られた。むろん、インフレが抑制されたということは、貨幣供給量の抑制と関係するわけで、高金利政策と財政緊縮策が効いたという経緯は、無視できない。レアル政策は、ようするにブラジルを強制的に不況におとし入れて、物価を抑制した政策だともいえるので、それへの評価は賛否がわかれている。

#### 設問Ⅲ(論述問題)

正答：省略

講評：問A、問Bともに、自分で問題やテーマを設定するような問題だったが、こういう場合、実は、何をテーマとして設定したかで、解答の質の大部分が決まる。つまり答案の冒頭の数行を読むだけで、答案全体の質の善し悪しがかなりの程度わかるのである。問Aについては、

「ブラジルの対米外交の矛盾」

「法律は進んでいるが、現実には遵法精神にかけているので、その間のギャップが矛盾である」、

問Bについては、

「ブラジルからの日本への出稼ぎは奨励すべきか否か」

「1990年代に政策を新自由主義の方向へ変更したことがよかったのかどうか」

「ブラジルは豊かなのか」

「ブラジルがグローバル化の中で生き抜くために何をすべきか」(以上大意)

などが、比較的すぐれた課題設定であった。「すぐれている」というのは、問題意識が先鋭だという意味である。

反対に、あまりよくない課題としては、「貧富格差の拡大について」「環境と開発の矛盾について」などであった。私自身、たしかに講義で重点をおいたテーマである。しかし状況をそのまま叙述することを課題としていては、採点者としては、ありきたりで、ありふれているという悪い印象を持ってしまう。むろん、このようなありふれた課題でも、解

答の説明内容が良かった場合には、たくさん点数を与えた。

まず問Aについてであるが、貧困問題が最大の矛盾だとして議論を展開した人は、かなり多かった。貧困というのは論じやすそうにみえて、実は一番議論の展開がたいへん難しい。ほとんどの解答が、貧困の意味を定義せず、所得が低いこと、所得格差が大きいことなどを漠然と掲げていた。非常に進んだ法律と、遵法精神の遅れという現実との間にあるギャップが、ブラジルの最大の矛盾だとした答案が、答案としては新鮮で（むろんこれもよく言われていることではあるが）、目を引いた。なお参加型予算のテーマの1つに環境問題があると、書いてある答案があったが、これはポルトアレグレ市での参加型予算に限った話である。私が講義で紹介したのは、主にポルトアレグレ市の経験で、ブラジルはほかにも異なる参加型予算がたくさんあるので、注意されたい。

問Bについては、第1に、ブラジルから日本への出稼ぎ労働者の問題を論じた答案は、分量はあまり多くなかったが、立場を明確に反対として、議論していた点を評価した。むろん、賛成でもよいのだが、とにかく白黒、イエス・ノーを明確にして議論を展開している点がよかった。現実社会では白黒を明確にできない 이슈も多いわけだが、少なくとも試験の答案としては賛成・反対が明快な答案を高く評価すべきだろうと思ったので、たくさん点を与えた。

第2に、ブラジルの戦略として、social embeddedness の概念を用いた人が1人だけいたが、このような難しい専門概念をきちんと理解して書かれた答案は、専門的で、よい答案だと判断した。さらに、ブラジルの高付加価値創造の戦略とくにマーケティング戦略について、ニューズウィーク誌の情報を紹介して具体的に論じたものもあった。採点者の知らない情報だったので、これもたくさん点を与えた。

第3に、ブラジル人のずるがしこさ (jeitinho) という気質を挙げた人もいて、興味深かったが、これは解答を書くのが難しいテーマである。答案としては新鮮で、たくさん点をあげたかったが、冷静に読むと分析不足の答案だと判断せざるを得なかった。本講義は社会科学であり、とくに経済学ないし社会学の講義であるから、気質論を実際の政治経済システムとかかわらせて論じる必要がある。せっかくの良いテーマだったので、そのあたりの書き込みが不足していて、残念だった（むろん部分点は与えている）。

なおAとBはあくまで選択問題だったが、両方を解答した人も数人いた。その努力は評価したかったが、残念ながら両方ともやや中途半端な答案となってしまっていた。よりよいほうだけを選んで採点した。

**成績上位者**（括弧内は、70点満点の試験の得点）：インターネット用は省略。  
筆記試験の平均点は、56点（70点満点中）だった。

## ■ レポートについて ■

いずれもよくかけていたので、提出されたレポート全てに15点を与えた。とくに拙著の弱点を指摘したものが、数点あったが、いずれも適切な指摘であった。環境問題など問題の状況を詳しく書いているが、「なぜ」という疑問に迫っていないレポートもあった。そういうレポートは、叙述的だが分析が不十分だという印象を受けたので、減点しようかどうか迷った。しかし詳しく丁寧に叙述されているので、結局15点の満点とした。

注意としては、いろいろなことを書くより、焦点を絞って深く追求するという姿勢で書くのがよい。そうすると、インパクトの強いレポートに仕上がるのである。点数は同じにしたが、インパクトの強いのと弱いのがあったことを、付記しておく。 ■以上終わり